

手足口病の報告数は減少しています。

【概況】

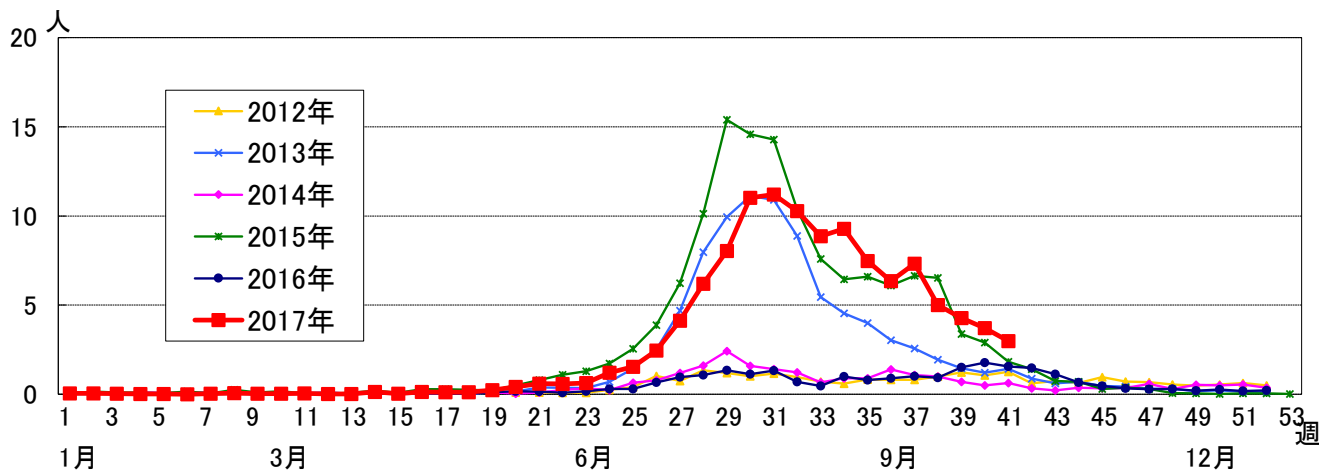
2017年第28週(7月10日～16日)に流行警報が発令され、第31週(7月31日～8月6日)をピークとして以降、現在は減少傾向にあり、第41週(10月9日～15日)は定点^{※1}あたり2.99となっています。**現在も警報は発令中ですので、引き続き注意が必要です。**直近5週間の報告患者の年齢構成は1歳(27.6%)が最も多く、次に2歳(17.0%)と、**5歳以下が全体の85.9%**を占めています。全国的に2017年はコクサッキーA6型(CA6)が多くを占めており^{※2}、横浜市内でも検出されています。CA6による手足口病では、従来の手足口病より水疱が大きいことや、発症後、数週間後に爪脱落が起こる症例(爪甲脱落症)が報告されています^{※3}。

※1 定点とは、毎週患者発生状況を報告していただいている医療機関(手足口病は小児科定点94か所から報告されています)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 [手足口病 週別分離・検出報告数\(エンテロウイルス\)、2009～2017年\(国立感染症研究所\)](#)

※3 [IDWR 2017年第28号<注目すべき感染症> 手足口病\(国立感染症研究所\)](#)

1 市内流行状況: 第19週で定点あたり0.24と増加を開始し、第26週で2.45、第27週で4.13、第28週で6.20と急増し、流行警報発令基準値(5.00)を上回りました。第31週をピークとして漸減し、第41週は2.99となっていますが、警報解除基準値(2.00)は下回っていません。

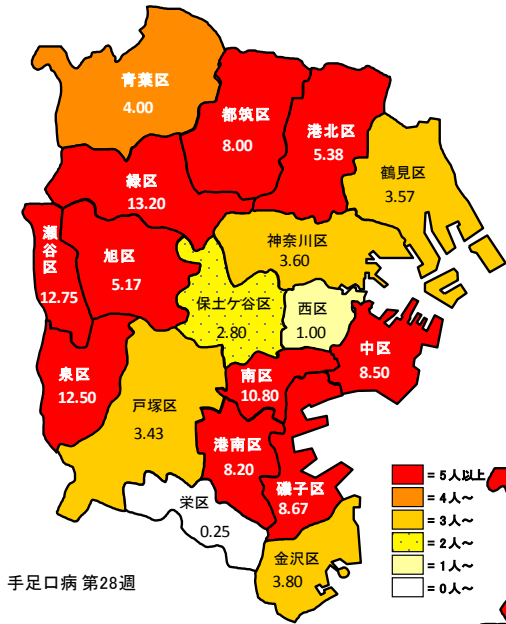


手足口病とは

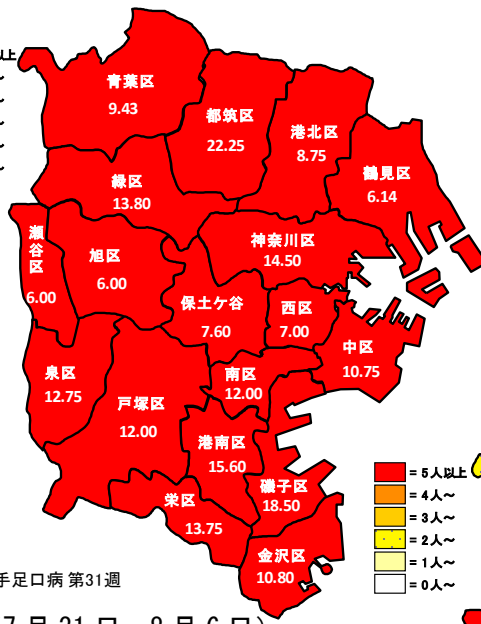
手足口病は、通常3～6日の潜伏期をおいて、手、足や口腔内(ときに肘、膝やおしりなどにも)に痛みを伴う水疱が出現します。熱は多くが38℃以下です。1週間程度で自然に治りますが、ごくまれに髄膜炎・脳炎などの重い合併症が起こる場合もあります。元気がない、頭痛・嘔吐を伴う、高熱を伴うなどといった症状が見られた場合は、速やかな受診が必要です。感染経路は飛沫感染、接触感染、経口(糞口)感染であり、乳幼児における感染予防は、手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

2 区別流行状況:区別では、11区で警報レベルとなっています。

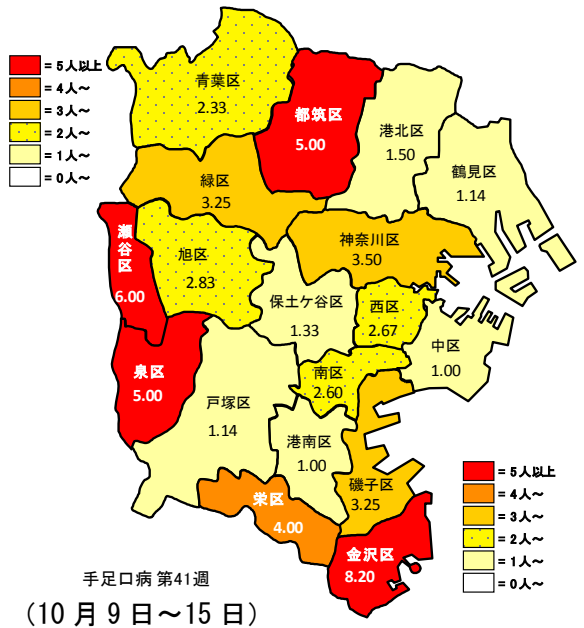
警報は、解除基準(定点あたり 2.00)を下回るまで続きます。
 2015年の流行では、第41週(10月5日~11日)、
 2013年の流行では、第38週(9月16日~22日)で解除されています。
 手足口病は、西日本から先行して流行して終息する傾向にあり、現在、西日本ではほとんどの自治体で解除基準を下回っています。



手足口病 第28週
 (7月10日~16日)
 【警報発令時】



手足口病 第31週
 (7月31日~8月6日)
 【ピーク時】



手足口病 第41週
 (10月9日~15日)

今シーズンの手足口病の臨時情報は今号が最終です。(再び報告数が大幅に増加した場合は発行します。) 今後の流行状況は[横浜市感染症情報センターホームページ](#)に掲載している「最新の感染症発生状況(横浜市内)」の「週報」の「定点情報」をご参照ください。

学校保健安全法での取り扱い

本疾患は学校において予防すべき感染症の第1種~3種には含まれていませんが、「[学校において予防すべき感染症の解説](#)」(文部科学省)では、「本人の全身状態が安定している場合は登校(園)可能。流行の阻止を狙っての登校(園)停止は有効性が低く、またウイルス排出期間が長いことから現実的ではない。」と記載されています。登校・登園については、主治医に相談することが望ましいでしょう。

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
 横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2463